



《特集》NIEだより 第20号発行記念



和歌山県NIE推進協議会会長
和歌山大学教育学部教授
船越 勝

「NIEだより」20号を迎えて

和歌山県NIE推進協議会が発行している「NIEだより」が20号を迎えました。本会が設立されたのは、1998年3月16日ですから、既に創設21年の歴史を数えます。この間、本会の会長は、碓井孝夫先生、市川純夫先生、松浦善満先生、川本治雄先生の各先生が務めてこられ、他の役員の皆様と協力して、和歌山県にNIEの取り組みを広げていくための様々なご努力を積み重ねてこられました。こうした和歌山の地での取り組みとその成果を掲載する形で、この「NIEだより」もほぼ毎年1号ずつ刊行されてきたのです。諸先輩方々のこれまでのご努力に心から感謝を申し上げます。

ところで、このような私たちが推進している、学校などで新聞を教材として活用するというNIEの取り組みをめぐっては、周知の通り、少なからぬ困難が指摘されてきました。それは、活字離れが進み、残念ながら、新聞の発行部数も減少を遂げているということとです。とりわけ、若い世代やこうした若い世代を教育する若手の先生方の活字離れが大きな課題として指摘されています。もちろんこの背景には、インターネットを初めとした、SNSの普及が関わっていることは言うまでもありません。しかし、こうした新聞などの旧来の紙媒体のアナログ・メディアと、インターネットやSNSなどのデジタル・メディアを対立的にとらえてしまっているのは、正しくないと考えています。

というのは、新聞は、世界から地域社会に至るまで様々な社会の現実（観性）が記者の確かな目（信頼性）を通して切り取られ、論評と解説を加えて述べられています。（詳報性と解説性）これらが新聞の大きな特徴です。それに対して、インターネットなどのデジタル・メディアは、情報化社会のなかで大量に生み出される莫大な情報に対応できる大きな情報量。次に、SNSなどを通じて、現場から直ちに発信されることによる速報性、発信者と受信者が言葉を交わし、情報を交換することができる双方向性などが大きな特徴と指摘できるでしょう。こちらは、お互い相手の側には欠けている特質なので、敵対すると言うより、相補的な関係として良いでしょう。

実際、「知の生産者」と言われている多くの達人は、新聞を初めとするアナログ・メディアとインターネットを初めとしたデジタル・メディアの両方を使いこなし、うまく組み合わせ、両者を活用されています。むしろインターネットやSNSなどが用いていない現代の若者は、こうしたデジタル・メディアの弱点にさらされていることに注意を向けるべきです。すなわち、信頼性に裏打ちされないような誤認の含まれた情報や、詳報性と解説性のない価値の不確かな情報が少なくないと言っています。

だからこそ、私たちは、若い世代に不確かな情報も含めて批判的に読み解くことができる読みの力やメディア・リテラシーを身に付けさせていくことが求められます。最近報道などで大きな反響を呼んでいます。PIISA2018の調査結果で、読解力が前回2015年の調査結果より、平均点及び順位とも大きく下落することになりました。これは、出題された問題がウェブサイトや電子メールなどの多様なデジタルテキストを活用して、読み解くことが求められたものだからだと論評されていますが、これはデジタル・メディアの学びの過少が引き起こしたものと考えるはなりません。むしろ「デジタル的なもの」も確かに読み解くことができるアナログ・メディアを基盤に置いた学びの過少が生み出したものであり、アナログ・メディアを通じた洗練された読みの力をこそ育てていくことが求められていると言っているのです。

そういう意味からも、今こそNIEの出番だと考え、実践を進めていきたいと思います。



「第10回記念 和歌山県小学校 NIEセミナー」に参加して

和歌山県NIE推進協議会 顧問 紀伊民報専務取締役 小山 雄希智

7月29日、和歌山大学教育学部附属小学校で開かれた、和歌山県小学校 NIEセミナーに参加させていただきました。今回は10回目の記念会として、日本新聞協会 NIEアドバイザーの中島順子さんによる教育現場での実践についての講演と、発案者の陸奥賢さんがレクチャーする「まわしよみ新聞」という充実した内容でした。

中島さんの講演の中で、多様化する情報化社会において、新聞は子どもが情報に触れる入り口になること、そこから得られる情報は人間関係を作るツールになることが印象に残りました。信頼性の高い情報を届けるため取材や編集に一貫した方針があることや、社会を俯瞰するような多様なニュースによる紙面構成など、教育分野と連携できるのは新聞ならではの特性だと思います。

後半の「まわしよみ新聞」は和気あいあいとし

たワークショップ。陸奥さんが、「まわしよみ新聞」の手法を編み出したいきさつを交えながらルールを紹介し、私も先生方に交じって参加しました。だれでも参加できる簡単なルールながら、新聞の魅力を引き出す工夫が施されているのが特徴です。直感的に琴線に触れた記事を切り抜くこと、それをグループ内でプレゼンすること、最後に共同作業で一枚の「壁新聞」を作ることがポイントになっていて、作業を進める中で自然とお互いの価値観の違いや多様性に気づかされます。そして選んだ情報を第三者に伝えるため、グループ討議で得た知見をもとにレイアウトやコメントなどを添えて編集し直すのですが、それによって、新聞紙がコミュニケーションの気配が残る新たな情報媒体へと生まれ変わります。単に情報を受け取るだけでなく、どう向き合うかを知らず知らずのうち

に考えさせてくれます。作業を終えた後は、グループで得られた共感や達成感から、開始前より人間関係が一段と深まるのも成果の一つです。

この「まわしよみ新聞」は中島さんの事例ともリンクするのですが、世代や立場を問わず、情報がコミュニケーションツールとして機能することを体感させてくれます。そのため弊社では新社会人向けの講座として、地域の行政や金融機関、一般企業を対象にしたビジネスセミナーにも取り入れていきます。学校や友達など共通項の多い人間関係を離れ社会に出る若者にとって、情報を軸としたコミュニケーションを取ることは、社会

の奥深さや仕事のやりがいを知るきっかけになりますし、それによって不安の軽減の一助になると思います。また研修以外にも、作業の中で人それぞれの性格や感性などを知ることでもできるため、採用の選考方法としても有用だと考えています。

加速度的に歩みを進める情報化と多様化の社会。過多ともいえるほどの情報と子どもたちや若者は向き合っているのかねばなりません。今回のNIEセミナーに参加したことで、より良い紙面づくりや時代に合った情報提供に取り組むのはもちろん、次の世代を育む役割を再確認し、教育分野とも一層緊密に連携していくことの大切さを感じました。

後半の「まわしよみ新聞」は和気あいあいとし

に考えさせてくれます。作業を終えた後は、グループで得られた共感や達成感から、開始前より人間関係を一段と深まるのも成果の一つです。



まわしよみ新聞をつくるセミナー参加者

教育に新聞を

エヌ・アイ・イー

和歌山県NIE推進協議会 ホームページを開設しました

～和歌山県の新聞活用授業実践例を紹介したサイトです～



アドレス=<https://nie.kiiminpo.jp/>

特別
寄稿

和歌山県の教育における 「新聞を活用した学び」への期待

和歌山県教育委員会 教育企画監 清水博行

来年夏、本県では初めて、第45回全国高等学校総合文化祭(紀の国わかやま総文2021)が開催されます。演劇や写真等の全22部門で、全国の高校生が日々磨き高めた芸術文化を通して交流を深めます。

高総文祭には新聞部門があり、受賞新聞の表彰・展示とともに、期間中、全国の新聞部員が

チームをつくって取材を行い、交流新聞を作成します。全国には優れた学校新聞を発行している新聞部も少なくはありませんが、全体的に見れば、新聞部の活動はかつてに比べると活発で

はないと言われている。その背景には、活字離れや価値観の多様化が進む中、共感を呼ぶ紙面づくりが困難となっていることがあると思います。今回の高総文祭で本県の高校生が良い刺激を受け、特色ある学校新聞を創る文化が各学校に再生することを期待しています。

というのは、私は高校生の一時期に新聞部に籍を置き、学校新聞づくりに携わった経験があるからです。約40年後、母校に赴任した際、図書館に大切に保存されていた当時の学校新聞と再会しました。紙面には、学校行事や



「紀の国わかやま総文2021」公式ポスター

部活動、先生のお宅を訪問取材した記事とともに、一面には高校生のモラル低下や自立した生活などをテーマとした主張やコラムもある、やや肩肘張ったような体裁でした。当時は、自分の思いや感じたことを活字にしたという思いが強かったようです。ともあれ、専用の原稿用紙の一マス一マスに文字を埋め、印刷工場の輪転機が回りだす直前まで見出しや紙面レイアウトを試行錯誤していたことが懐かしく思い出されます。

今の私の新聞との付き合い方として、役所で毎朝、県内の学校、児童生徒に関する記事や、全国的な教育に関する記事、論説などをチェックし、読み比べることがルーティンとなっています。最近、注目したのは、経済協力開発機構(OECD)による国際学習到達度調査(PISA)で、日本の生徒(高校1年生)の読解力が前回調査に引き続いて低下しているという記事です。

かなり前から、若者の活字離れは深刻な問題でありましたが、近年、SNSの普及が、その問題に拍車をかけていると言われていました。しかし、今回の調査で明らかとなったのは、ウェブ、サイトや電子メール等、多様なデジタルテキストから、必要な情報を探し出したり、いくつかの文章を比べて情報の質や信頼性を評価する問の正答率が低いことでした。今日、スマホを活用して、様々な情報を瞬時に手にすることができず、実態は情報が頭の中を素通りし、本質的なことが脳に残っていないという深刻な問題です。

「意味がわかって読める」ことが大事だと言われますが、これは文章をただ読むのではなく、書き手の言いたいことを的確に理解しながら、自分の知識や価値観と照らし合わせながら読み、時には、書き手の主張に意見するような読み方を指します。

このような本質的な読む力を育む上で、新聞を活用することは大変、有意義だと思います。何紙かの新聞を読み比べてみると、同じテーマであっても、何を切り口にするかは異なっていることが分かります。そこから、「どういうバックグラウンド(思想や経験)を持っている人が書いたのか」、「どういう主張をしたくて、書いたのか」などを探るスキルを獲得することにつながります。さらに、そうしたスキルは、他人の意見に流されずに自らの頭で考え、それを他者に伝えるように根拠を示して説明する力になります。読む力は、国語の教科書だけで育まれるものではありません。理科や社会など全ての教科や総合的な探究の時間などを教科横断的につなぎ、新聞やウェブサイト等、様々な媒体も活用した学びが、本県において盛んに展開されることを期待しています。

「いっしょに読もう! 新聞コンクール」

日本新聞協会は、このほど第10回「いっしょに読もう! 新聞コンクール」の受賞者を発表しました。

全国から57、561編の応募があり、小・中・高校部門の最優秀賞を各1編(合計3編)、審査員特別賞を1編、優秀賞を校種別に各10編(合計30編)、奨励賞を118編選んだと発表がありました。

また、団体応募441校の中から、優秀学校賞を小・中・高校各5校の合計15校、学校奨励賞182校が選定されています。

和歌山県内では、小学校から311編、中学校から225編、全体で536編の応募がありました。そのうち全国審査会で、優秀賞に和歌山市立砂山小学校5年の石津理沙さん、御坊市立御坊小学校5年の木村友則さん、奨励賞に和歌山市立四箇郷北小学校6年の森田心結さん、県立日高等学校附属中学校2年の小森涼葉さんが選

全国優秀賞に

石津 理沙さん(和歌山市立砂山小5年)

木村 友則さん(御坊市立御坊小5年)

森田 心結さん(和歌山市立四箇郷北小6年)

小森 涼葉さん(県立日高等学校附属中2年)

ばれました。学校奨励賞には和歌山市立砂山小学校、和歌山市立四箇郷北小学校、紀美野町立小川小学校、海南市立東海南中学校、県立日高等学校附属中学校が選ばれました。

同時に県審査会において、優秀賞に21名、奨励賞に31名を選定しました。県内の受賞状況は、和歌山県NIE推進協議会ホームページ(<https://nie.kinipou.jp/>)に掲載しています。

第11回「いっしょに読もう! 新聞コンクール」は2019年11月26日(火)から始まっており、作品の提出締切りは、2020年9月9日(水)です。多くの学校、多くの児童・生徒の皆さんの参加をお願いいたします。

なお、応募の詳細については、日本新聞協会NIEホームページ(<https://nie.jp/>)をご覧ください。



小森 涼葉さん



森田 心結さん



木村 友則さん



石津 理沙さん

※写真掲載は保護者の了解を得ています

「いっしょに読もう! 新聞コンクール」

日本新聞協会は、今年も「いっしょに読もう! 新聞コンクール」を実施します。家族や友人といっしょに記事を読み、感想・意見などを書いて、記事とともに応募いただく新聞感想文コンクールです。

1 新聞を読もう



2 記事を決めよう



3 記事を読んで考えたことを書こう



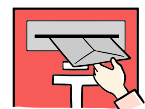
4 家族や友だちに意見を聞こう



5 まとめよう



6 応募しよう



●対象：小・中・高校・高等専門学校生

●募集要項：2019年9月9日～2020年9月8日の新聞協会加盟社等が発行する新聞から興味を持った記事を切り抜き、家族や友だちにも見せて意見を聞いたり話し合ったりしたうえで、応募用紙に記入して記事といっしょに送ってください。

●応募締め切り：2020年9月9日(水)必着

主催：一般社団法人日本新聞協会

コンクールの詳細(応募・問い合わせ先、対象紙一覧など)▶NIEウェブサイト <https://nie.jp>